

詩人John Keatsの願望：ソネット「ジェイムス・ライスに寄せて」

奥 田 喜八郎

奈良教育大学英語教育講座 (英米文学)
(平成16年4月19日受理)

The Poet John Keats's Wishes: His Sonnet of "To James Rice"

OKUDA Kihachiro

(Department of English and American Literature, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan)
(Received April 19th, 2004)

Abstract

The purpose of this study is to demonstrate the poet Keats's wishes (which are unrealisable) at the age of 23, word for word perusing and enjoying Keats's sonnet titled "To James Rice" written c. 20 April 1818.

John Keats (1795-1821) was a British poet considered among the greatest in English. His works, melodic and rich in classical imagery, include "The Eve of St. Agnes," "Ode on a Grecian Urn," "To Autumn" (all 1819), and "To James Rice".

A literary critic Robert Gittings (1911-92) states in *John Keats* (1968) that Rice, a young lawyer in his father's firm, was incurably ill, visiting Sidmouth in Devon and Shanklin in Isle of Wight for his health; but he made light of his affliction with constant wit and gaiety. Gittings mentions that Rice, neat and dapper, had the sufferer's gift of husbanding his energy, and that suffering too had given Rice a wisdom which Keats recognized and admired, saying that Rice 'makes you laugh and think'.

Keats met Rice through John Hamilton Reynolds (1794-1852) in 1817 and Keats went with Rice to Shanklin and Keats remained warmly attached to him, saying that 'Rice is the most sensible, and even wise Man I know.'

This paper is to examine Keats's early death on the basis of these proverbs, "Whom the gods love die young," and "The gifted die young," in the English sonnet, also called Shakespearean form, containing three quatrains and a terminal couplet in iambic pentameter with the rhyme pattern (abab cdcd efef gg). This is a most singular poem, in which Keats himself uses subjunctive moods in each line of the sonnet.

Key Words : Subjunctive Moods, his wishes, tuberculosis

キーワード : 仮定法, 願望, 結核

イングランドの後期ロマン主義を代表する John Keats(1795-1821)に、珍しい14行詩がある。「ジェイムス・ライスに寄せて」("To James Rice")という sonnet である。イギリスの女流批評家 Miriam Allott (1918-) 説によると、製作年月は、—Written c. 20 April 1818—と

いう。当時、詩人 Keats は23歳である。その頃に知り合った友人 James Rice に寄せて、こう歌い上げるのだ。

Oh, that a week could be an age, and we
Felt part/-ing and warm meet/-ing ev/-ery week!

Then one poor year a thou/-sand years would be,
 The flush of wel/-come ev/-er on the cheek.
 So could we live long life in lit/-tle space,
 So time it/-self would be an/-ni/-hi/-late,
 So a day's jour/-ney in ob/-liv/-i/-ous haze
 To serve our joys would length/-en and di/-late.
 Oh, to ar/-rive each Mon/-day morn from Ind!
 To land each Tues/-day from the rich Le/-vant!
 In lit/-tle time a host of joys to bind,
 And keep our souls in one e/-ter/-nal pant!
 This morn, my friend, and yes/-ter/-eve/-ning taught
 Me how to har/-bour such a hap/-py thought.

という sonnet である（音節記入は筆者のもの）。これは、イギリスの女流批評家 Allott の『ジョン・キーツ詩集』（*The Poems of John Keats*, 1986）から引用したものである。念のために、イギリスの文学者 Ernest de Selincourt (1870-1943) の『ジョン・キーツ詩集』（*The Poems of John Keats*, 1920）のそれと比べて見ると、de Selincourt は、1 行目を -O THAT- と大文字で歌うのだ。9 行目は、-O to arrive- と歌うのだ。また、2 行目の最後に comma を用い、更に、4 行目の最後に colon を用いるのである。また、イギリスの学者で、批評家 Christopher Bruce Ricks (1933-) の『ジョン・キーツ全詩集』（*John Keats: the Complete Poems*, 1988）のそれと見比べてみると、1 行目 -O that- と、また 9 行目は、-O- と歌うのだ。さらに、句読点は de Selincourt と同じである。Oh と読むのも面白い。また、O と読むのもいい。些細な句読点の相違も楽しい。

気になるのは、7 行目の音節である。ご覧の通り、11 音節であるからだ。1 音節多い。つまり、字余りである。oblivious の 4 音節 ob/-liv/-i/-ous を 3 音節になると、全体の「弱強調 5 歩律」に調和し、完璧なリズムとなる。思うに、この形容詞の後半の 2 音節 -.../-i/-ous- を 1 音節、つまり、2 重母音 [.../-ias] と読むと、7 行目も 10 音節となる。これは「母音融合」(Synaeresis) といい、「隣接する 2 個の母音を 1 個の母音、すなわち、2 重母音として律読する」ことが許されるからである。

音節で気懸かりなのは 2 行目の every である。木原研三は、これを ev/-ery と分節する。それに対して、柴田徹士は、eve/-ry と区切るからである。小西友七は後者の eve/-ry である。分節の仕方には定則がない、のが現実である。しかし、間違いなく、every は 2 音節の単語である。

このように、この sonnet の各行の歩律はすべて「弱強調 5 歩律」（10 音節）から成り立つ。完璧である。次に、この脚韻の押韻を調べて見たい。ご覧の通り -we, week, be, cheek, space, an/-ni/-hi/-late, haze, di/-late, Ind, Le/-vant, bind, pant, taught, thought- と押韻する。

問題なのは 2 箇所である。(1) 5 行目の space と 7 行目の haze の脚韻である。また、(2) 9 行目の Ind と 11 行目の bind の脚韻である。前者の space は /speis/ と発音し、haze は /heiz/ と発音するからである。母音の後の子音 /s/ と /z/ は異なるからでだ。しかし、これは「不完全韻」(imperfect rhyme) といい、このように「類似の音」もまた許される韻である。

後者の Ind は、India の文語で、/ind/ と発音する。bind は /baind/ と発音する。母音が異なるからである。一方は単母音であり、他方は 2 重母音である。しかし、これは「視覚韻」(Eye or Visual rhyme) といい、「spelling は同じであって視覚的には rhyme のすがたを見せているようでも、発音を全く異にする場合」もまた許される韻である。これは別に spelling rhyme ともいう。このように、脚韻もまた完璧である。rhyme は -abab cdcd efef gg- と押韻するからである。然し、松浦暢は『キーツのソネット集』（*Keats' Sonnets*, 1966）の中に「Rhyme: -abab cdce fgfg hh」と説明する。これは誤植なのか、それとも誤読なのか。押韻が狂っているからである。

以上で問題はすべて解決済みである。完璧な歩律と、完璧な脚韻である。この新しい「イギリス風 sonnet」の詩型を用いて、詩人 Keats は声高らかに 23 歳の「実現不可能な願望」を歌い上げるのである。珍品である。

おお、一週間は一生涯でありえるならばなあ、そして我々は毎週
 別離と暖かい出会いの喜怒哀楽を感じるならばいいのになあ！
 そうすれば僅かな一年でも必ず一千年にもなるだろうになあ、
 歓迎の感激に酔えばいつでも我が厚顔は赤らむだろうになあ。
 もしそうならば寸刻寸時に長い人生を生きえるだろうになあ、
 もしそうならば時間その物がかならず消滅するだろうになあ、
 もしそうならば我々を心からよこばせるために忘却の霞敷く
 一日の旅程は必ずより長くなりまたより広くなるだろうになあ、
 おお、毎週月曜日の朝、共和国インドから遥々到着するとしたら！
 毎週火曜日の夕、あの裕福なレバント地方から上陸するとしたら！
 数多くの喜びの天使たちをただちに母神の手で包みこむとしたら！
 そしておお神よ、我々の魂は永久にあなたを慕いあえぐとしたら！
 今朝も会って、我が友は、昨夕と同じようにこのような楽しい楽しい
 ことを、この僕の心にいだくその抱き方を教えてくれるならばなあ。

と詩人 Keats が切々と歌い上げるのではあるまいか。

これは珍しい作品であることを上記に既に指摘して置いた。理由は各行がすべて「仮定法」を用いて歌われているからである。これは、結核患者 Keats にとって「現実には起こりそうもない仮定の話」である。それではこの珍品の 1 語 1 句に立ち止まり、その意味を探り、その味を調べてみることにしよう。

まず詩人 Keats はこう歌い始めるのだ。

Oh, that a week could be an age, and we

Felt parting and warm meeting every week!
Then one poor year a thousand years would be,
The flush of welcome ever on the cheek.

これは、「最初の4行」(the First quatrain)である。松浦は1行目の「O (Oh) that...= I wish」であるという。間投詞Oは、「願望などの感情を表す」もので、たとえば、O that I were young now.(= I wish I were young now.) (「ああ、今若かったらなあ」) というふうに用いられる間投詞である。現在は oh が普通である。Oh は Allott 版であり、O は de Selincourt 版と Ricks 版と松浦版である。前者の oh は独立的な感嘆符や句読点を従えるが、後者の O は文語で、通例後に感嘆符や comma をつけないという。それぞれの編集者の詩的意図が伺われて、面白い。筆者は文語の O に同感する。

このように、重複するが、「仮定法」が使用されるのである。1行目は、

I wish (that) a week could be an age!
と詩人 Keats が仮定するのだ。それに続けて、2行目も、
..., and I wish (that) we
felt parting and warm meeting every week!
と詩人 Keats は仮定し、さらに、3行目も、ご覧の通り、
Then one poor year would be a thousand years,
と歌うのだ。ここに言う would は仮定法の過去形である。
そして、詩人 Keats は、4行目を、
The flush of welcome would be ever on the cheek.
と仮定するのだ、と筆者は思う。

I wish...というの「～であるならいいのになあ」という一種の仮定法である。福島隆彦説によると、wish は、ごく普通の一般動詞のように思えるが、そうではないという。この wish だけは「実現不可能、あるいは可能性の少ない困難なことを望む」という基本的な意味をもつ、という変な動詞であるからだ。hope という動詞と比べてみると、この変な wish はより明らかになるだろう。

詩人 Keats はまず、I wish (that) a week could be an age! と歌うのだ。この that はリズム上省略される。これは、

一週間は一生涯でありえるならばいいのになあ!

と歌うのだろう。ここには、無論、「実際はそうでないので残念だ」という気持ちが込められている。

ここに言う助動詞 could は仮定法の過去形である。このように過去形の仕事は、David Barker 説によると、過去時制を表すことではなく、「現実からの距離感＝現実から離れた願望」を示すことだという。つまり詩人 Keats は「仮定法の過去形」に託して、「23歳の、現実から離れた願望」を切々と歌うのだ。

厄介なのは、どうして詩人 Keats はあえて “a week” を歌い、そして “an age” と規定するのか、ということである。前者の a week には、2種類の説明がある。(1)通例月

曜日から日曜日までの7日間であるという説と、(2)通例日曜日から土曜日までの7日間であるという説ある。前者は小西友七説であり、後者は木原研三説である。

念のために、COD を参照すると、Period of seven days reckoned usu. from and to midnight on Saturday-Sunday. という。また、A. S. Hornby は any period of seven days; (esp) seven days from Saturday midnight to Saturday midnight. という。土曜日の真夜中12:00から数えて、次の土曜日の真夜中12:00までの7日間であるというのだ。土曜日の真夜中12:00から数える、という「月」を中心にしたイギリス人の「曜日」の数え方は面白い。

Cobuild 版の英英辞典によると、A week is a period of seven days. Some people consider that a week starts on Monday and ends on Sunday. という。ここに言う、some people、というのは興味深い。御教示を願いたい。

然し、日曜日は、1971年から国際標準化機関 (ISO) に従って正式には第7日となったという。

思うに詩人 Keats はこの “a week” に託して『聖書』の「創世記」に明記する「天地創造の由来」のイメージを重ねているのではあるまいか。神は第一日の作業を終えられる。そして、神は第二日、第三日、第四日、第五日、第六日の作業を終えられて、「こうして天と地と、その万象とが完成した。」そして、「そのすべての作業を終わって第七日に休まれた。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終わって休まれたからである。」と明記されているからだ。このように、神は「一週間」(a week)で「天地創造」の作業を完成された、という偉業を重ねて、詩人 Keats は、高らかに “an age” と歌い上げるのではあるまいか。つまり、詩人 Keats は、「一週間」に託して、自分もまた「生涯の仕事」を終えたい、という願望を声高らかに歌い上げるのではないか、というのが筆者の解釈である。

元早稲田大学教授出口保夫訳を見ると、「ああ、一週間が一年であってほしい、」と読むのである。「一年」というのは、『岩波国語辞典』によると、「1月から12月までの間」であるという。Cobuild 版によると、A year is a period of twelve months or 365 or 366 days, beginning on the first of January and ending on the thirty-first of December. と説明する。出口はこの “an age” を、“a year” と読むのである。

“An age” というと、例えば、the age of steam and steel. というように、a period in history. をいう。また、Your age is the number of years that you have lived. という英文を思い出すからである。

また、Three score years and ten is the age of man. (「70が人間の寿命である。」) という一文を想起す

るからだ。これは、『聖書』の「詩篇」の中の
The days of our years are threescore years and
ten; and if by reason of strength they be fourscore
years, yet is their strength labour and sorrow; for
it is soon cut off, and we fly away.

という第90篇第10節の神の言葉である。これは「われらのよわいは70年にすぎません。あるいは健やかであっても80年でしょう。しかしその一生はただ、ほねおりと悩みであって、その過ぎゆくことは速く、われらは飛び去るのです。」というこの神の人 Moses の祈りは重要である。この神の人 Moses の言葉を踏まえて、詩人 Keats はここに敢えて“an Age”と歌うのである。

詩人 Keats は、神の人 Moses が言う「人間の寿命70年」を願う。「健やかで」ない身の上であるから「80年」は望めない、と諦める。然し、詩人 Keats にとって「70年」もまた夢の夢である。せめて、その半分の35年でもいいから生き続けたい、と詩人 Keats は願う。そして、「詩人の仕事」を完成させたい、と詩人 Keats は祈願する。がしかし、それも望めそうも無い。

神の偉業が「一週間」で成し遂げられた。詩人 Keats も、あと残された余命の内に、つまり、この“an age”に託して「詩人としての偉業」を完成させたい、と歌うのだと思う。それ故に、筆者はこの“an age”を、出口訳の“a year”ではなく、「一生涯」と読む者である。

あれは、数えて8年前の1810年のことであった。Keats は弱冠15歳の時であった。母は病魔に取り付かれ、肺病にかかったのだ。Keats は幾晩も徹夜をして母を看病した。薬を給することも人手に任せず、Keats は自分の手で薬を飲ませた。母の食事の調理さえも Keats は自らし、給仕した。病勢がやや怠る時には、Keats は書物を読んで、母を慰めた。しかし、看病の甲斐もなく、母は病死した。

その6年前の1804年に、父は交通事故で亡くなった。その時、Keats は9歳であった。

その上、スコットランド旅行から帰省した Keats を驚かせたのは、弟 Tom の差し迫った病気の重さであった。Tom も、母の病魔と同じ「肺結核」の診断が下されていた。Fred Inglis は、『キーツ』(Keats, 1966)の中に、愛しい三男 Tom Keats について、
He is always a shadowy figure, yet vitally present
in John's story. He died aged nineteen on 30
November 1818, having been an invalid most of his
life, and virtually prostrate the last two years.

という。弟 Tom は1818年の晩秋11月の末30日に亡くなったという。彼は19歳であった。それにしても、Tom は生まれた時からの病弱の子であったというのは気の毒である。しかも、Tom は亡くなる前の2年間は事実上寝たきりの生活であったという。起き上がることも出来ない程、肺結核が重く、衰弱も著しい限りであった。更に、Inglis は、

George and John kept persuading one another that Tom was improving, but he scarcely seems to have done so, and in these two years always needed an attendant.

と指摘する。ここに言う George というのは、次男である。長男は John (詩人 Keats) である。この2人の兄たちが交替で三男 Tom を看病し、回復に向かっていることを信じ合ったという。しかし、Tom の病状はそうではなかった。重複するが、亡くなる2年間はほとんど付き添いが必要である程、Tom は衰弱し切っていたという。そして、Inglis は、

Yet he was constantly deprecating his illness, or pretending to an improvement which wasn't there, and he was unfailingly gentle and cheerful.

と紹介する。Tom は厄病神に取り付かれた、わが身の不甲斐なさを歎くという。時々、Tom は、ありえない事だが、回復に向かっている素振りをしたり、また優しくなったり、また快活を装ったりするという。これも、2人の兄達の看護に対する Tom のささやかな感謝の表現であるのも、労しい限りである。Inglis はそれに続けて、

Sadly, there can be little doubt that John himself caught tuberculosis of the lungs from Tom.

と強調する。疑う余地もなく、この時長男 John Keats 自身も弟 Tom から肺結核を感染したという。

Inglis は、Keats 一家の不幸について、
父 Thomas Keats died in a riding accident in 1804.
母 Frances died abruptly in 1810.

長男 John died on 23 February 1821. (Allott 説)

次男 George died of consumptions aged 44.

三男 Tom died aged 19 on 30 November 1818.

長女 Frances (Fanny) died in Spain at 85, the only one of the Keats family to live into a full old age. という。神の人 Moses の言う、天寿を全うしたのは、ただ長女 Frances のみである。母も、長男も、次男も、三男も、共に「肺結核」で亡くなっているのだ。ここにいう次男の、病名 consumption というのは、古語で、特に pulmonary tuberculosis の俗称である。

このように、長女 Frances のみが、「人間の寿命70歳」しかも、健康な人間であれば、80歳という、神の人 Moses の言葉通り以上の、健やかな長女 Frances である。がしかし、長女以外は、神の意志に反して、皆が早世である。

重複するが、弟 Tom が亡くなったのは、1818年晩秋11月30日であった。当時、長兄であり詩人 John Keats は23歳であった。それから数えて、3年後の、1821年の冬2月の半ば16日に、詩人 Keats もまた同じ肺結核で、異国の地ローマで他界した。当時、詩人 Keats は正確には、25歳と8月であった。

詩人 Keats が友人 James Rice に捧げた、この Sonnet

の制作日は, Allott 説によると, 1818年の春4月の20日頃であった。弟 Tom が亡くなったのは1818年の晩秋11月の終わりの30日であったことを思い起こすと, Tom が亡くなる, 7ヶ月前の制作となる。弟 Tom はすでに起き上がることの出来ない状態であり, すでに Keats も肺結核に感染していたことになる。

松浦は注釈に「続く詩行は Vita brevis の歎きであり,」と読む。ここにいう vita brevis というのは, ご存知の, あの有名な諺, Ars longa, vita brevis. (Art is long, life is short. 「芸術は長く, 人生は短し」) の後半の「人生は短し」を意味するものである。

この諺の示す, 「人生は短し」の人生というのは, 神の人 Moses が明記する, あの「人間の寿命は70年」を明示するものである, と思う。「健やかであれば, 80年」という人生を, 上記の「諺」が意味するものであって詩人 Keats の短命を明示する「人生は短し」ではない, と思う。

勿論, 詩人 Keats は松浦の指摘するように, Art longa, vita brevis. という諺を踏まえて, 己の「宿命的な短命の儚さ」を切実に歌い上げる, 白眉の sonnet である。そして, 詩人 Keats は, 上記の神の人 Moses の言葉を踏まえて, 「おお, 一週間が一生涯でありえるならばいいのになあ!」と切に願うのではあるまいか。そして, 詩人 Keats が,

...and (I wish) we

Felt parting and warm meeting every week!

と歌い続けるのである。これも仮定法である。「そして我々は…を感じるならばいいのになあ!」と歌うのだろう。ここにいう“felt<feel”は仮定法の過去形である。たとえば, I wish I had two eyes. (「目が2つあればいいのになあ」) というふうに, 使われる過去形である。出口訳を見ると, 「そうすれば, われわれは…感じただろう,」と読むのだ。これは変である。

「そうすれば」という接続詞 and の出口の読み方は気になる。出口は「後者は前者の結果」として接続詞 and を読むからである。これは別に『準等位的接続詞』という。

詩人 Keats の歌うこの接続詞 and は『等位接続詞』である, と筆者は思う。「前後に同じ位の節を結ぶ」接続詞 and であるというのが, 筆者の解釈である。

気懸かりなのは, 詩人 Keats の歌う“we felt…”の we の解釈である。これは, (1)「包括的 we」なのか, それとも, (2)「総称の we」であるのか, である。前者は「話し手(I)と聞き手(You), または話し手と聞き手と他の人」を含む we であり, 後者は前者の「包括的 we」の総称用法であり, one, people の代用語である。念のため, they というのは「話し手と聞き手を除外した」総称用法であるという。そして, we と they であるが, これは「we があれば,

they がいる」という関係である。つまり, 「we を使うと, その反対語 they の存在が想定される」という。またそれに対して「同様に they を使った時には we が想定される」というのだ。つまり, 例えば, we should obey the law. (「われわれは法律を守らなければならない。’) というと, 「法律を守らない別のグループ(= They)の存在を」明示する, という。

このように, we を使うと, they が対置されるために, ある種の「排他性」や「優越性」を主張しているように受け取られかねない, と T. D. Minton が強調する。勿論「話し手の方ではほとんどそのような意識は持っていないだろうが,」とも Minton は指摘する。

詩人 Keats の歌う we というのは, 上記に紹介した(1)の「包括的 we」であろうか, と筆者は思う。その we に託して Minton が説明する「we と they の対置」を是非とも読みたいと思う。

「喜怒哀楽を感じるならばいいのになあ」と願うグループ(We)と, それを願わないグループ(They)とが対置して歌われている, と筆者は読む者である。例えここに「排他性」が歌われていようとも, 或いは「優越性」が明示されていようとも, である。筆者は, 両者が共に歌われている詩興であると, 精読したい。

詩人 Keats は, “(Oh, that) we felt parting!”と歌うのだ。重複するが, ここに言う felt は過去時制ではない。これは仮定法の過去形である。これは「現実からの距離感」をつたえ, 「現実から離れた願望」を切々と示す felt である。

詩人 Keats は, 「feel + 動名詞」という語法を用いるのだ。feel というのは, feeler (「昆虫の触角」) の示すように, 基本的に皮膚感覚の語である。「触角に訴える能動的な意志行為(…に触れる)」から「精神的知覚(…とを感じる)」そして「感性的判断(…と思う)」までを表す語である。また, feel は「証拠がないけど, なんとなく, そう思う」とか, 「そう感じる」という気持ちを表す動詞である。

(1) parting は, 動詞 part (「人と別れる」) に接尾辞-ing が付いた動名詞である。(2) meeting も動詞 meet (「人とあう」) に接尾辞-ing が付いた動名詞である。Cobuild 版によると, 「別れ」には, 様々な別れがある。例えば, When two people part, or if one person parts from another, they leave each other. という「別れ」がある。これは, つまり「一期一会」のような別れである。更に, If you are parted from someone you love, you are prevented from being with them. という別れもある。恋人との別れは辛い。両親や, 兄弟との死別ほど, 悲しいものはない。

ここに想起するのは, 「ルカによる福音書」の第24章第51節の中の,

And it came to pass, while he blessed them, he was parted from, and carried up into heaven.

という神の言葉である。「神が、死別した父母や弟 Tom 達を祝福された」としても、また「祝福しておられるうちに、彼らを離れて、天にあげられた」としても、詩人 Keats にとって、彼らとの地上での死別は痛ましい限りである。

「出会い」について、Cobuild 版に、If you meet someone, you happen to be in the same place as them and start talking to them. You may know the other person, but be surprised to see them, or you may not know them at all. という「出会い」がある。これも「一期一会」の出会いである。そして、ともに打ち解けあって、親密だ。

然し、わが国には「逢うは別れの始め」という「無情」の譬えが語り継がれている。これは中国の唐の白居易の言葉であることを承知している。イングランドでも、これと同じ言い方がある。We meet only to part. がこれである。この根底には、彼らは人と人との出会いも、また別れも、神の意志によるものである、と信じているのだ。特に、別れの挨拶に「神」が登場する。例えば、good-bye (=God be with ye!) である。また、Good-bye till we meet again. である。これは「ではまたいずれ。」という「社交場」での挨拶言葉だ。更に、the meeting=house は《米》では「礼拝所、教会堂」をいい、《英》ではクェーカー宗徒の礼拝所をいう。

詩人 Keats は、この出会いを、warm meeting と歌うのだ。warm というのは、高温を表す hot と、その反対語 cold との間の温度をいう。「暖かい」warm は比喩的によく使われる。例えば、She received a very warm welcome. (「大変暖かい歓迎をうけた。’) というふうに、である。思うに詩人 Keats はこの形容詞 warm に託して、「温情に満ちた」という感情を歌うのではないか。「愛情に富んだ出会い」と歌うのか。「心の温かい人との出会い」を歌うのだろう。

然も、詩人 Keats は、every week と規定するのだ。every というのは、ever each が原義である。発話者が主観的に見た全ての週、という意味であろう。every は「その場その場」というふうに、名詞が並ぶ日本語表現を用いるとよい。例えば、every coast line (「海岸線という海外線’) というふうに、である。「その週その週」という感じを抱いて、そして我々は毎週別離と暖かい出会いの喜怒哀楽を感じるならばいいのになあ！

と詩人 Keats は高らかに願うのではあるまいか。そして詩人 Keats は、それに続けて、Then one poor year a thousand years would be, と歌うのである。これは倒置法である。

Then one poor year would be a thousand years, という would は、勿論、仮定法の過去形である。この文の骨格の意味は「一年は必ず一千年になるだろうになあ」と願うのだろう。しかも、詩人 Keats は、then と定めるのだ。これは、思うに「もしそうならば」という「推理などの順序を示す」副詞である。これは往々にして、when または if と相関的に用いられる副詞であるという。「我々は…哀楽を感じるならばいいのになあ！」を受けて、「もしそうなら一年は必ず一千年になるだろうになあ」と歌うのではないか。この副詞 then は、「場面（状況）が変わることを」示す単語である。

然も、詩人 Keats は「一年是一年」でも、one poor year と定めるのだ。a year ではなく、one year である。これは特に「正確に」言いたい時の言い方であり、強めたい言い方である。ここに言う形容詞 poor は、rich, wealthy の反対語ではない。これは、[数・量]を示す「僅かな」「たったの」という意味である。例えば、a poor one pound a week (「週にたったの1ポンド’) というふうに、である。出口訳を見ると、「そのとき わずかの一年が 一千年にもなり」と読む。筆者も「僅かな一年」と読むのだが、出口訳の「そのとき」の then は気になる。もしそうならば僅かな一年でも必ず一千年にもなるだろうになあ。と詩人 Keats は願うのではなからうか、というのが筆者の解釈である。そして、詩人 Keats は更に、The flush of welcome ever on the cheek.

と歌うのだ。見ると、動詞が省略されている。これは、3行目の仮定法の過去形 would be と叫応して、The flush of welcome would be ever on the cheek. と歌い上げるのではないか。これは絶妙な歌い振りである。ここに歌う副詞 ever は大変重要である。これは、「(一度ぐらひは) …することもあるのか」という意味を持つ副詞である。これは、ご存知の通り、「個人的な経験を述べる時にはその人が生まれてから現在までの期間を表す」副詞 ever である。これは、never の気持ちを裏に含み、実際に起こる可能性の少ないことを合意することの多い副詞である。詩人 Keats は恐らく、

歓迎の感激に酔えばいつでも我が厚顔は必ず赤らむだろうになあ。と歌うのではあるまいか。出口訳を見ると「喜びの色をいつも 満面に浮かべていたであろう。」と読む。ever を「いつも」と読む。勿論、これは (a) 「どんな時にも、常に」を合意し、強意を表す語 ever であることを、筆者は承知している。しかし、[肯定文で]「いつも」という場合は、通例次のような語句とともに用いられる副詞である。例えば、He is ever the same. とか、

I am ever ready to help him. とか、

I have known him ever since (then). とか、

They lived happily ever after. というふうに、である。然しこれ以外の ever は、文語であるという。この文語

ever も筆者はすでに承知している。がしかし、出口訳は不自然である。

岩波版の『英和辞典』には、(b) いつでも、(=at any time). 《主として否定・疑問の文および仮定・附属の節に用いる》という説明があるのは有り難い。

また、気になるのは、詩人 Keats の歌う the cheek である。定冠詞 the は発話者 Keats を指すが、しかし問題は cheek である。これは、cheek であって、cheeks ではないからだ。

Cobuild 版を見ると、

(1) Your cheeks are the sides of your face below your eyes.

(2) You say that someone has a cheek when you are annoyed or shocked at something unreasonable that they have done.

と説明する。詩人 Keats の歌う the cheek は、後者 (2) の意味を示す、というのが筆者の解釈である。出口訳を見ると、「満面」と読む。これは可笑しい。

「満面」というのは、「顔全体」「顔じゅう」という意味で、例えば「満面に笑みをたたえる」とか、「満面に朱をそそぐ」という諺を想起するからだ。特に、後者の「満面に朱をそそぐ」というのは、「怒りで顔を真っ赤にする」という意味であるからである。筆者は、この the cheek に、俗語としての「あつかましさ」が明示されている、と読む者である。「厚顔無恥」の Keats が歌われている、というのが筆者の解釈である。勿論、この「厚顔無恥」は、「マタイによる福音書」の第5章第39節の中の、
But I say unto you, That ye resist not evil; but whosoever shall smite thee on thy right cheek, turn to him the other also.

という神の言葉が下敷きになっている。

また、詩人 Keats の歌う the flush of welcome というのは、2行目の warm meeting の形容詞 warm とがお互いに呼応する詩興であると思う。というのは、welcome というと、I give her a warm welcome. (「心から歓迎する。」) という普通の言い方を思い出すからである。この a warm welcome の形容詞 warm が、この warm meeting に波及しているのは、見事である。

The flush of welcome という flush は、常に「突然に」という意味を暗示する語である。人や顔がぱっと赤くなる、という動詞の場合、flush は男に、blush は女に多く用いる傾向がある。名詞 flush は、(1)「突然の紅潮」、(2)「感激、大得意」などの意味がある。前者は、A flush colored her cheeks. (「彼女のほおはぱっと赤らんだ。」) というふうに、使われ、後者は、in the first flush of victory (「勝利の最初の感激に酔って」) というふうに、用いられることを思うに、詩人 Keats は、恐らくは、「歓迎の感激に酔えば」と願うのではあるまいか。

おお、一週間は一生涯でありえるならばなあ、そして我々は毎週別離と暖かい出会いの喜怒哀楽を感じるならばいいのになあ！
そうすれば僅かな一年でも必ず一千年にもなるだろうになあ、
歓迎の感激に酔えばいつでも我が厚顔は赤らむだろうになあ。

と詩人 Keats は「最初の4行」を歌い上げるのだろう。これは、つまり、漢詩の絶句を組み立てる、「起・承・転・結」の「起」の世界である。ここには、詩人 Keats はなによりも「物理的な時間」の儚さを歌い、それに合わせて「肉体」の脆さを歌うのではあるまいか。これは、正に、あの神の人 Moses がいう「しかし、一生はただ、ほねおりと悩みであって、その過ぎゆくことは速く、われらは飛び去るのです。」である。それに「人間味」の乏しい自分に対する嫌悪感をも歌う「起」の世界である。

この神の人 Moses の言葉を受けて、詩人 Keats は「次の4行」(the second quatrain)の世界をこう歌い上げる。
So could we live long life in little space,
So time itself would be annihilate,
So a day's journey in oblivious haze
To serve our joys would lengthen and dilate.
各行は仮定法である。1行目は、倒置法である。
So we could live long life in little space,
と歌う。この would が仮定法の過去形である。2行目も、
So time itself would be annihilate,
と歌うのだ。この would も仮定法の過去形である。さらに、
3行目4行目は1文である。倒置法である。詩人 Keats は、
So a day's journey in oblivious haze
would lengthen and dilate to serve our joys,
と歌うのだ。ここの would もまた仮定法の過去形である。

仮定法とは、大西泰斗によると、「仮定法時制はヤクザもの」で「普通の時制と違って妙な形式」で、「また時制の一致にも従」わないという。「すなわち、事実と反対のこと、起こる可能性が低いことを表す」のが、仮定法だという。

T. D. Minton は「仮定法とは、反実仮想」であるという。

Patricia T. O'Conner は「次の目的で動詞を表すときは、仮定法を取る。

(1) 願望 I wish Jack were here.

(2) 事実ではない仮定的な説明 If Jack were here...

(3) 提案や要求 We insist that Jack be here.」という。

阿部一は、「仮定の気持ちを、形の上では過去形でいい表すというのは、過去形にすると、“現在のことではない”という心理的な距離感がでてくるからだという。

(1) Where could you buy toys?

(2) Where can you buy toys?

Could を使うと、今買う予定がないし、買う必要性もないが、“もし万一買うとしたら”という仮定の気持ちが出て

くるわけ」であるという。

ただの条件の文,すなわち「直説法・現在の文」(indicative mood present)は仮定法ではないことに,注意しよう。副島隆彦は,(1)「仮定法の文」と(2)「ただの条件の文」の区別をつけることが,仮定法という特殊な世界を理解する鍵であるという。前者は「個人の意見,感情の表現の世界」であり,後者は「現実・事実についての世界」であるという。

副島説の「個人の感情や意見に過ぎないものが仮定法(subjunctive mood)の世界」というのが最重要である。それと合わせて,「仮定法の文では,動詞の形が過去時制になる」ことである。つまり,「現在の時点で仮定する」ということである。「If 節中の動詞が過去形になっているので,仮定法・過去の文」というのである。

詩人 Keats の歌う世界は,正に,この副島説の「仮定法・過去の文」である。「この“過去”は,日本語では,“現在”の時点で訳さなくてはいけない」と副島は強調する。筆者も同感である。

副島は,「仮定法は,皮肉・嫌味・中傷・侮辱あるいは後悔や自己斬愧の感情がこもる」ものであるという。また,彼は「仮定法・過去の文はコワイ」といい,「仮定法とは,最高度に洗練された表現法だ」ともいう。「嫌味や皮肉や当てこすりや,軽い脅迫的言辞」であるからだという。そして,仮定法のこの「法」(mood「気分」)と呼ぶ理由が分るだろう,と強調するのである。面白い,有意義な説である。

尾崎哲夫は「仮定法という破壊者」という。この「仮定法病」の「治療法」として,「仮定法は,事実に反する仮定の文であることを,まず,以下のように頭に注入する」という。

“実際はお金がないけど,もしお金があればスポーツカーを買うのに”

“実際は若くないが,もし若ければ留学するのに”

“実際は翼が無いのに,もし翼があったら彼のところに飛んでいくのに”

以上のような事実に反する事例を頭に注入していく」という「治療法」は見事である。

Peter Milward は,(1)「単純条件」と(2)「仮定条件」の2種類に区別する。前者は,Simpleといい,「やがて満たされる単純条件」であり,後者は,Unfulfilledといい,また「現時点では満たすことができない仮定条件」であるという。「未来の満たされえない仮定条件の例として,If he were to come tonight (but he won't, or at least it is very unlikely), I would have nothing to offer him.」という。そして「現在の満たされえない仮定条件の例として,If he were here now (but he isn't), I would give him a piece of my mind.」という。更に「過去の満たされえない仮定条件の例として,If he

had been at the game yesterday (but he wasn't), he would have been thrilled.」という。

上記の Peter の(…)の中の心の声が重要である。これは「満たされえない」心の声である。

このように,まず Peter 説を踏まえて見ると,詩人 Keats の歌う世界は,「未来も現在も満たされえない」願望そのものである。また,尾崎説や大西説を下敷きにしてみると,この sonnet は「反事実」の世界である。そして副島説から作品を精読すると,詩人 Keats 自身の「後悔や嫌味や中傷や皮肉や侮辱」などの感情が吐露されている世界であると言えよう。

それ故に詩人 Keats は2重の仮定法,即ち,仮定法の上に仮定法を重ねて「こんな自分でなければいいのになあ!」と歌い上げるのではあるまいか。つまり,結論的にいうと,友人 James Rice のような「機知と面白みのある人間であればいいのになあ!」と歌うのが,思うにこの14行詩の「みそ」であろう。

それでは,詩人 Keats の歌う「2番目の4行」(the second quatrain)の世界を味読しよう。重複するが,So could we live long life in little space,と歌うのだ。このように,詩人 Keats は各行の文頭に,so を用いる。これは,副詞なのか,接続詞なのか,である。

出口訳を見ると「そこでわれわれは…」と読む。「そこで」というのは「そういうわけで」とか,「さて」という意味であり,接続詞である。「そういう事態になったので」と出口は読むのだろうか。それとも,「今までのべた事は,そういう事にしておいて」と出口は読むのか。

松浦は「かくして,われわれは短い人生に末長くいきられよう。」という注釈を添えている。「かくして」というのは,『連語』で「こうして」とか,「このようにして」という意味である。『連語』とは,文法上一語とほぼ同じような働きをする,2つ以上の語の連なりをいう。「かく」は副詞で,「かくして」「かくのごとく」というように用いられるという。

このように出口は so を接続詞と読み,松浦は副詞と読む。しかし,筆者はこの文頭のsoをそれぞれ,if so(「もしそうなら」)のifの省略と読む者である。これが筆者の解釈である。soは「既に述べたことを指す」副詞であり,The flush of welcome (would be) ever on the cheek.を指す,というのは筆者の解釈である。

「もしそうなら」「もしそうなら」「もしそうなら」と詩人 Keats はここに3回も繰り返し,高らかに歌うのではないか。これは思うに,「もし歓迎の感激に酔って一度でも我が厚顔は赤らむのであれば」と仮定するのだ,と思われる。

If soのsoという語は,Mintonによると,強いエネルギーを持つ語であるという。面白い。この「飛び上がる感じ」の語soを受けて,それぞれの仮定文は,意外な世界に

着地するという.その「ちょっと大げさな変な仮定」というのは,即ち,

- (1) We could live long life in little space, であり,また,
- (2) Time itself would be annihilate, であり,更に,
- (3) A day's journey in oblivious haze would lengthen and dilate to serve our joys. という詩興である.

まず,(1)の主節のin little spaceというのは,厄介である.松浦は,「in little space = in a short of human life」という注釈を添える.松浦は「短い人生に」と読むのだ.出口訳を見ると,「われわれは 短い人生を長く生きることができるであろう,」と読むのだ.

ここにいうspaceというのは,a space of time(「時間」)を意味するのではあるまいか.つまり,a period of time(「(時の)間」)を明示する,というのが筆者の解釈である.例えば,the [that] space of(「(..)の間」)とか,in the space of ten hours(「10時間のうちに」)とか,in space of time(「ある長さの時間」)といい,for a space(「暫く(の間)」)というふうに,である.

思うに,little spaceといえば,「少時」という意味であり,long spaceといえば「長時間」とか,またshort spaceといえば「短時間」というふうに,使われるspaceである,というのが筆者の解釈である.

またここにいう,littleというのは,「限りなく“O”に近い(こと)」をイメージする形容詞であることを思うに,詩人Keatsの歌う,in little spaceというのは,客観的に見た「寸時」「少時」を意味する,と筆者は読みたい.これは「起・承・転・結」の「承」の世界である.「起」の「肉体の時間」から「承」の「魂の時間」への移り変わる世界である.想起するのは,先輩詩人で画家のWilliam Blake(1757-1827)が歌う

To see a World in a grain of sand,
And a Heaven in a wild flower,
Hold Infinity in the palm of your hand,
And Eternity in an hour.

という4行である.これは,傑作“Auguries of Innocence”の中の最初の4行である.ご覧の通り,「一粒の砂の中に一つの世界を見,一輪の野花の中に一つの天国を見,掌の中に無限を握り,一時間の中に永遠を握る」という“無限の意義や永劫の生命”を歌い上げた作品である.

この神秘思想家Blakeの「無限の意義や永劫の生命」の影響を受けて,後輩詩人Keatsは厳格に,“long life in little space”と歌うのではあるまいか.

もしそうなら我々は寸刻寸時に長い人生を生きえるだろうになあ,と歌うのだろう.そして,詩人Keatsはそれに続けて,

- (2) So time itself would be annihilate,
- と歌うのだ.wouldは仮定法の過去形である.

面倒なのは,annihilateという語である.これは,ご覧の通り,叙述用法の形容詞であるからだ.しかし,内外の辞

書を調べても,annihilateという語は,動詞である.

Cobuild版を見ると,これは,動詞として,
Annihilate (annihilates, annihilating, annihilated)
To annihilate something means to destroy it completely.
If you annihilate someone in a contest or argument,you totally defeat them.

という説明がある.そして名詞はannihilationである.上記の動詞は他動詞,自動詞の意味もある.

Random House版によると,『物理』<粒子が>対消滅する.という.そして,annihilatedは,別に《米俗》で「(酒・麻薬に)酔った」という意味をもつ形容詞である.

Annihilableは,「全滅[絶滅]できる」という意味をもつ形容詞である.名詞は,annihilabilityという.

この外にも,annihilative, annihilatoryという形容詞がある.前者のannihilativeは,be annihilative of life(「生命を消滅させる」)という語法での形容詞である.名詞はannihilationという.これは,『キリスト教』用語として,「空[無]に帰すること,靈魂絶滅[消滅],(死における靈魂の)寂滅,(悪人死後の)必滅」という意味をもつという.

この『キリスト教』の意味を踏まえて,「靈魂絶滅[消滅]説・悪人の魂は死後必滅するという信仰」のことを,annihilationismという.その信仰者をannihilationistという.当時の詩人Keatsはこの「肉体の死に伴う靈魂の絶滅」説を信仰していたのではあるまいか.

また,この破壊者を,annihilatorという.別に,『数学』用語として,「ベクトル空間のある群のすべて0に移す一次関数全体の群」を意味するという.難解な語である.

出口訳を見ると,「時間そのものも 消滅し,」と読む.これは動詞なのか,形容詞なのか,である.また,仮定法過去形のwouldを無視するのは,いかがなものか.

このように,would be annihilateというannihilateは,重複するが,形容詞としてここに使用されているが,しかしこれは動詞である.それを,詩人Keatsは,ご覧の通り,叙述用法の形容詞としてここに歌うのである.これを一体どう読めばよいのか,である.

筆者は思う.annihilateという語は,中英語adnichilat(e)に由来し,これが元後期ラテン語のannihilatusに由来する「過去分詞」である.これは「動詞」annihilare(「無に帰する」)が変化した「過去分詞」annihilateである.「an-+ nihil(無)+ -atus(-ate)」というラテン語の「過去分詞」の形をそのまま詩人Keatsがここに用いる.これが筆者の解釈である.「過去分詞」即ち「形容詞」即ち「叙述用法形容詞」として詩人Keatsは歌うのだと思われる.

重複するが,この6行目の音節は,
So time it/-self would be an/-ni/-hi/-late
というふうに,10音節でなければならないのだ.そのため

に、4音節の an/-ni/-hi/-late が不可欠である。上記で紹介した形容詞はすべて、ご覧のように、「字余り」である。

また、脚韻を見ると、an/-ni/-hi/-late と di/-late というふうに、整然と押韻する。この押韻も絶対不可欠である。

思うに、詩人 Keats は

もしそうならば時間そのものは必ず消滅するであろうになあ、
と歌うのではないか。itself は、「強意用法」の再帰代名詞である。そして、詩人 Keats は、

(3) So a day's journey in oblivious haze

To serve our joys would lengthen and dilate.

と歌うのだ。「もしそうなら」と歌い上げて、詩人 Keats は、先ず、A day's journey would lengthen. と願うのだ。ここにいう would は勿論仮定法の過去形である。lengthen という語は、自動詞である。名詞は、length という。形容詞は、long である。これは、「時間・空間上、端から端まで長い」が本義である。自動詞 lengthen は、例えば The days are beginning to lengthen.=The days are getting longer. (「日は長くなるかけている。') というふうに、使われる動詞である。思うに、これは、旅先の魅力に惹かれて「一日の旅程は必ずより長くなるだろうになあ」と歌うのか。

しかも、詩人 Keats は、A day's journey would lengthen and dilate. と定めるのである。dilate という語は、自動詞である。これは元ラテン語の dilatare から派生した語である。「広げる」という原義を有するという。これは特に「身体の器官を広げる」というイメージをもつ。たとえば、with dilated eyes (「目を見張る。')とか、また dilate one's eyes (「目を丸くする。') というふうに、使われる語である。面白い。これは、旅先の魅力に感動して「一日の旅程でも必ずより広くなるだろうになあ」と歌うのではないか。

Journey という語は「一日 (jour) の行程」が原義である。通例、陸路のかなり長い、時として骨の折れる旅行をイメージする。また時として、帰らない場合もある、という旅である。類似語の trip は、「軽く踏む」が原義である。《米》では、長・短いずれの旅行にも用いるが、《英》では、短い旅行をいう。voyage は、「道(via)」が原義である。これは海路・空路の長い旅をイメージする。

たとえば、a day's trip というと、「日帰りの旅行」という。それに対して、a day's journey というと、「一日の旅程」という。これは旅程に要する時間をいう。たとえば、It is (a) four days' journey from here. (「そこはここから4日の旅程だ。') というふうに、である。不定冠詞 a を付けるのは最近の語法であるという。a four days' journey=a journey of four days=a four-day journey ともいう。

思うに詩人 Keats は a day's journey に託して「ここからは丸一日を要する旅程」を歌うのだろう。

出口訳を見ると、「一日の旅は長くなり 拡がるであろう、」と読む。気になることは、やはり、出口は仮定法の過去形の would を無視する読み方であることだ。それも、出口は「われわれの喜びに仕えるために」と読む。

ここに、詩人 Keats は、「to 不定詞」の副詞用法を用いて、to serve our joys と規定する。our というのは、1行目に明示する主格 we の所有格であり、また5行目の主格 we の所有格である。これは「我々を心からよろこばせるために」と歌うのだろうか。ここにいう joy というのは、great happiness をイメージする語である。

類似語の pleasure の動詞 please は「人を楽しませる」が本義である。enjoyment の動詞 enjoy は「中に(en)喜び (joy) を持つ」が原義である。happiness の形容詞 happy は「偶然(hap)の(y) (幸運による)」が原義であるという。joy は「うれしさの度合いが深くかつ持続的で、こみ上げるような喜び」を明示する名詞である。詩人 Keats はこの名詞 joy を2度繰り返し歌うのである。

思い出すのは、A thing of beauty is a joy for ever. (「美は永遠の喜びなり。') という詩人 Keats の名台詞である。また、full of the joys of spring (「とてもうれしそうで。') というフレーズである。更に、1712年以降、英国で活躍した独逸生まれの作曲家 George Frideric Handel (1685-1759)が作曲した、あの有名な『もろびとこぞりて』(Joy to the World) である。「こみ上げる喜び」を賞味しよう。

さらに、詩人 Keats は、in oblivious haze と歌い上げるのだ。haze という名詞は、中英語 hase の名詞用法である。これは、古英語 hasu の異形であるという。「灰色の、薄暗い」という原義を有するという。《米》では、主に「ほこり」が原因の場合を dry haze といい、「水滴」が原因の場合を damp haze といって、区別するようである。

《英》では、通例、light fog や mist と同じ意味で使われるようだ。類似語の mist は「暗黒」が原義であり、fog はノルウェー語の fogg から派生した語で、「湿地帯の長い草、霧の深い (foggy)」が本義である。mist は haze より「濃い霧」をいい、fog より「薄い霧」をいうようだ。しかし、mist は「神のベール」を表し、「豊穡」をイメージするという。

念のために、Cobuild 版を見ると、Haze is light mist, caused by particles of water or dust in the air, which prevents you from seeing distant objects clearly. Haze often forms in hot weather. と説明する。英和辞典を見ると、haze に「もや、かすみ、煙霧」という訳がある。

出口訳を見ると、「忘却の霞に包まれた」と読む。筆者も同感である。「かすみ」というと、「かすみか雲か」とか、また「かすみがかかる」とか、「かすみがかたなびく」といって、「たなびいて山のふもとなどに白くぼうっと

かかる、うすい雲のようなもの」を想起するからである。「細かい水滴が集まりただよって起こる」光景をよく見かけるからである。「花かすみ」とは詩的な言葉である。

「かすみ」というと、春のかすみを言う。しかし、奈良時代には、秋のも言ったようであるが、後世は、「春を霞」「秋のを霧」という。

一面に霞がひろがることを、「霞敷く」という。また「霞渡る」という。しかし、「霞がかかる」というと、「おおうよになびく」風情である。また、「霞がたなびく」というと、「横に長くかかる」様子であることを思うに、詩人Keatsの歌う、in oblivious hazeをどう読めばよいにか。筆者は、思い切って、『源氏物語』の「若紫」の中の「はるかに霞渡りて、四方の木ずえ、そこはかとなうけぶり渡れるほど」という言葉に引かれて、「忘却の霞渡りて」と読もうか。

それとも、『千載和歌集』の「春」の中の「霞敷く春の潮路を見渡せば」という言葉に倣って、「忘却の霞敷く」とでも読もうか。迷うのであるが、もしそうならば我々を心から喜ばせるために、忘却の霞敷く一日の旅は必ずより長くなるだろうし、またより広くなるだろうになあ。と歌うのではあるまいか。それにしても、不思議なことは、oblivious hazeという歌い方である。このobliviousというのは、普通、「叙述用法」の形容詞であるからだ。例えば、She was oblivious of his admiration.（「彼は見とれているのに気がつかなかった。」）というふうに、使用される語であるからである。このように、「叙述用法」の形容詞は、Minton 説によると、名詞を「定義している」ことである。

しかし、ご覧の通り、詩人 Keats は、oblivious を「限定用法」の形容詞として歌うのではないか。調べて見ると、この場合は、古語であり詩語であって、例えば「＜眠りなどが＞忘れさせる」という意味であるらしい。oblivious slumber というと、「忘れさせる眠り」即ち「忘却の眠り」というふうに、である。Minton 説によると、「忘れさせる眠り」といえば、aware（「気づいて」）ではない霞を指すという。これが「限定」形容詞の使い方である、というのが Minton 説である。「比較の機能を果たしているわけ」である。面白い英語感覚である。

「忘却」と言えば、想起するのは、あの『ギリシャ神話』に登場する、the river of oblivion である。これは、黄泉の国(Hades)に流れている、「忘却の川」である。別に、「レテ」(Lethe)という。亡霊がこの川の水を飲むと、浮世のこと、即ち、自己の過去のことをすべて忘れる、という川である。

思うに詩人Keatsはこの「忘却の川」を下敷きにして、「忘却の霞」と厳粛に歌うのではないか。これは英米文学史上、詩人Keatsの斬新な着想である。

「神のベール」「豊穡」をイメージする mist に対し

て、「浮世のことを一切忘れさせてくれる」というhazeのイメージは、絶妙である。「自己の過去をもすべて忘れさせてくれる霞(haze)」というのは詩人 Keats の新しいアイディアである。

もしそうならば寸刻寸時に長い人生を生きえるだろうになあ、もしそうならば時間そのものはかならず消滅するだろうになあ、もしそうならば我々を心からよこばせるために忘却の霞敷く一日の旅は必ずより長くなり、またより広くなるだろうになあ。

これが「2番目の4行」の世界である。「起・承・転・結」の「承」の世界である。つまり、肉体を離れた「魂」の世界である。ここに詩人 Keats は「魂の旅路」を夢見ているのである。実際には、肺結核患者 Keats にとって、the journey of life（「人生行路」）はもはや覚束ないかぎりである。せめて、国内は然る事ながら、国外の異質な文化を見聞できれば、どんなに有り難いことか。嬉しいことか。願わくば、man's journey from savagery to civilization（「人類の未開から文明化への道のり」）を、借りた書物からでも辿りたい。異国の詩人達の作品を味読したい。

先輩詩人で、辞書編集者で、批評家の Samuel Johnson (1709-84)の旅行記『スコットランド西方諸島旅行記』(A Journey to the Western Islands of Scotland, 1775)を手にして、スコットランドを旅したのは本当に楽しかった。1796年1月25日に過労による心臓障害がもとで、37歳にして病死した先輩詩人 Robert Burns (1757-96)のお墓をお参りしたのは夢のまた夢であった。その時の感動を歌い上げたのが、「バーンズのお墓をお参りして」(“On Visiting the Tomb of Birns”, 1818)と題する sonnet である。またスコットランド Firth of Clyde の入り口にそびえる玄武岩の孤島を眺めたのも、夢幻のようであった。それは高さ340m.の小島で、Ailse Craig という。まるで Pyramid のようで、魔可不思議な島であった。妖精の棲む島に感激した詩人Keatsは後に歌い上げたのが、「エイルサ岩礁に」(“To Ailsa Rock”1818)と題する sonnet である。後日、この2編のsonnetsを通して「詩人Keatsのスコットランド旅行の印象」を書き上げたいと思考している。

あるいは、詩人 Keats は、この journey に託して、古代ギリシャ芸術の魅力を教えてくれた、恩師であり友人画家の Benjamin Robert Haydon (1786-1846)を通して知ったB. Gozzoliの、あの有名なフレスコ画の『三王のベツレヘムへの行列』(The Journey of the Magi to Bethlehem, 1459-63)の世界を夢見ていたのではあるまいか。(本誌掲載の(1)拙文「文学少年キーツの見た歴史画家ヘイドン」平成13年発行。(2)拙文「詩人Keats 作“On Seeing the Elgin Marbles”」平成14年発行を参

考)

そして、詩人Keatsは次の「3番目の4行」(the third quatrain)をこう歌うのだ。

Oh, to arrive each Monday morn from Ind!
To land each Tuesday from the rich Levant!
In little time a host of joys to bind
And keep our souls in one eternal pant!

これは、「起・承・転・結」の「転」の世界である。ここはご覧の通り、「to不定詞」を用いた「假定」の世界であり、珍しい歌う方である、というのが筆者の解釈である。

松浦は、「O to arrive... = O I wish I could arrive...」であるという注釈を添える。これは1つの読み方であると思うのだが、しかし、無理である。1行目は、
O I wish I could arrive each Monday morn from Ind!

であるから、「...到着できればいいのになあ!」と読める。これはこれでよい。2行目は、

O I wish I could land each Tuesday from the rich Levant!

であるから、「...上陸できればいいのになあ!」と読める。これはこれでよい。しかし、3行目4行目は、どう読めばよいのか。3行目は、恐らくは

O I wish I could bind a host of joys in little time!
となるだろう。「...束ねることができればいいのになあ!」と読める。これもこれでよい。しかし、4行目は、

And O I wish I could keep our souls in one eternal pant!

となるだろう。「我々の魂を...喘ぎの中にとどめることができるのになあ!」と読めようか、である。

気になるのは、our soulsの所有格ourである。ここは所有格myで、my soulであれば、問題はない。しかし、詩人Keatsの歌うのは、主格Iで、所有格ourである。これは、どうも不自然である、と思われるからである。

出口訳を見ると、「...帰って来られたら!」「...戻って来られたら!」「...束ね、そして...委ねられたら!」と読む。筆者はこの出口訳に同感する。

再考するに、詩人Keatsは、8行目の前半を「to不定詞」を用いて、to serve our joys...と歌い上げていた。これは「副詞的用法」として、「我々を心からよろこばせるために」と筆者は味読した。文頭にif soが歌われているからである。if soがなければ、この「to不定詞」を「假定」を明示するものとして、「我々を心から喜ばせようと思えば」と精読したであろう。

このような含みを持って、詩人Keatsは、ここに「to不定詞」を使用するのだと思われる。勿論、両者とも「副詞的用法」である。一方は「目的」を明示し、他方は「假定」を明示する「to不定詞」である、と筆者は思う。

例えば、Random House版を見ると、I should be

sorry to have to quarrel with you. (「あなたと言い争いをしなければならないとしたら残念です。」) というふうに、用いられているのだと思う。つまり、

Oh, to arrive...! (「おお,...から到着するとしたらなあ!」)とか、あるいは、To land...! (「...から上陸するとしたらなあ!」)とか、そして、...to bind, and keep...! (「...を束ねるとしたらなあ、[...を束ねて、]そして、...をとどめるとしたらなあ!」)と詩人Keatsは歌うのではあるまいか。これが筆者の解釈である。重複するが、詩人Keatsは、
Oh, to arrive each Monday morn from Ind!

と仮定する。arriveという動詞は、「水路で岸(river)に着く」が原義である。面白い。これは、A. W. Frisby版によると、to get to the place to which we are going.と説明する。多分、到着地点は英国だろう。それにしても、当時の交通機関は、馬車か船であることを思うに、どんなに悠長な船旅であったことか。

出発地点はIndである。Indというのは、Indiaの文語である。Indiaは、元英国領インド直轄州(British India)と藩王国(India States and Agencies)の大部分を含むアジア南部の共和国インドをいう。パキスタンとの分離独立したのが1947年8月15日だという。1949年に英国連邦加盟国となり、1950年1月26日に新憲法を公布した。Indiaという語は、元ギリシャ語のIndiaから派生した語である。これはIndos (「インダス川」)という原義を有するという。松浦は、「Ind=India (archaic and poet.)」という注釈を添える。mornというのは、morningの文語・詩語である。

詩人Keatsは、each Monday mornと歌う。このeachは、Mondayを形容するのか、それともmornを形容するのか、である。出口訳を見ると、「毎月曜日の朝」と読む。

次の行に詩人Keatsは、each Tuesdayと歌うのだ。これを参考にして見ると、やはり、ここはeach Mondayと読むべきだろうか。「毎月曜日」とでも歌うのか。「月曜日毎」とでも言うのか、である。

eachというのは、Minton説によると、「自分が支配下にあるものに対して平等に目を向く」という語感が重要である。everyよりeachは個別性が強い語である。例えばeach yearという、「年々」とあるとか、またeach dayという、「日々」とあるとか、さらに、each nightという、「夜毎」というふうに、である。

筆者は、このeach Monday mornを「毎週月曜日の朝」と読みたい。そして、次の行のeach Tuesdayを「毎週火曜日」と読む者である。

疑問がある。どうして詩人Keatsは敢えてMondayをここに規定するのか、である。というのは、ご存知のように、米俗として、Monday man (「洗濯物泥棒」)とか、Monday-morning (「(働く気の起きない) 月曜日の朝のように」)や、blue Monday (「憂鬱な月曜日」)等を

承知しているからである。

Monday と言う語は、元後期ラテン語の *Lunae dies* から派生した語で、*day of the Moon* という原義を有するという。*Black Monday* というのは、(1) 古語で、*Easter Monday* をいう。これは「復活祭 (*Easter Sunday*) の翌日で、法定休日 (*bank holiday*)」である。(2) 英国の学生達の俗語で、「休憩明け直後の登校日」をいう。また、英国の戯言として、*Saint Monday* (「聖月曜日」) といい、これは労働者などが日曜日に大酒など飲んで月曜日に休む時にいうのである。

思うに詩人 Keats にとって「月曜日」というのは、上記の *Black Monday* であり、また *Saint Monday* なのであろうと思われる。すなわち、後のフランスの文芸批評家 *Charles Augustin Sainte-Beuve* (1804-69) が、いみじくも言い表しているあの有名な評論集『月曜閑話』(*Monday Chat*, 1849-61) そのものではあるまいか。

何よりも伝統的な *Black Monday* や *Saint Monday* を踏まえた、唯一の“*Monday Chat*”, 即ち月曜閑話を楽しむ当時の詩人 Keats であるからだと思われる。

おお、毎週月曜日の朝共和国インドから遥々到着するとしたら!

と歌うのではないか。共和国インドからの客を迎えて、ともに、屈託も無く月曜閑話のひと時を過ごすのも巧妙である。遠い船旅の疲れも忘れて、無駄話をするのもいいものである。そして、詩人 Keats は

To land each Tuesday from the rich Levant!

と歌うのだ。*Levant* というのは、地中海東岸にあるレバント地方をいう。この語は、元中世フランス語の *levant* から派生する「現在分詞の名詞用法」であるという。これは「太陽が昇るところ」という原義を有する語で、「東方」を指すという。レバント地方は、原産の上質モロッコ革で有名な地方である。これで財を成し、豊かな国となったのだ。松浦は、

Levant = Eastern part of the Mediterranean with its island and neighbouring countries. [F. It. levante point where the sun rises]

という注釈を添える。「あの裕福なレバント地方」と歌うのか。*land* という動詞は、*Cobuild* 版によると、*When someone lands a plane, ship, or spacecraft, or when it lands, it arrives somewhere after a journey.* という説明がある。簡単に言うと、*Frisby* 版に曰く、*to leave a ship and go on to the shore.* という意味である。

出発地点は地中海東岸のレバント地方である。そして、船の向かうのは、英国である。

毎週火曜日にあの裕福なレバント地方から遥々上陸するとしたら! と詩人 Keats は高らかに歌うのではないか。出口訳を見ると、「毎火曜日の朝」と読むのだ。どうして「朝」なのか、筆者には解らない。これは、恐らくは、前の行に、*each*

Monday morn と歌われているからだと思われる。

然し、筆者には別の解釈がある。例えば、次の13行目に、*This morn, my friend, and yester-evening taught* と詩人 Keats は歌う。注目したいのは、*morn* に対する *evening* である。この *evening* が、案外、ここに歌う、*each Monday morn* に対して、*each Tuesday evening* を暗示している、と読めないものか、と筆者は愚考するからである。

なにはともあれ、*Tuesday* というのは、古英語で *tiwesdaeg* といい、元は成句 *Tiwes daeg* ('day of Tiu') であったという。ご存知のように、*Tie* というのは、ゲルマン民族の軍神の名である。これは、どうもラテン語の *Martis dies* ('day of Mars') から派生したものであるといい、またギリシャ語の *hemera Areos* ('day of Ares') から派生ものだという。

Tiu というのは、古英語で *Tiw* といい、'god of war' という意味である。これは元インド・ヨーロッパ語族の **dyeus* から派生した語であるという。名詞 **dyeus* の、動詞は **dei-* といい、'to shine' という原義を有するという。これはラテン語の *deus* (god) と、ギリシャ語の *Zeus* と関係がありそうである。

Tiu は『チュートン神話』に登場する、「空と戦争の神」であり、『北欧神話』に登場する *Tyr* に相当する。

Tyr というのは、「もと天上を支配する神」で、「勇敢な犠牲的戦いの神」であるという。「一本の手は *Fenrir* にかみ取られたために、片手のない姿で表される」という。

Fenrir というのは、「狼の姿をした怪物で *Loki* の長子」である。「小島に繋がれていた神々の最期 (*Ragnarok*) の際自由になり、*Odin* を食い、その息子 *Vidar* に殺される」という。

Loki というのは、「アスガルド (*Asgard*) に所属するが、時には裏切って、最も悪辣な敵対者となる」という。*Odin* というのは、ご存知の「万物の神で戦争・死・詩歌・魔法・知能などを司る最高神」である。*Odin* の息子 *Vidar* は、「怪力無双の無言の神」である。

Asgard というのは、「アースの神々 (*Aesir*) の国で障壁がめぐらしてあり、12の神の住居がある」という。

Ragnarok というのは、「世界の破滅、神々の最期、神々のたそがれ」をいう。「神々と巨人との大決戦で世界破滅の時」をいい、「以後世界は極寒の冬となり、大地は海中に没するが、その冬が終わるや、永遠に青々とした大地が海中から浮上し、新しい世代の神も来、生き残った一組の人間夫婦が子孫をつくってゆく」という。

この *Ragnarok* という語は、古代ノース語で *ragnarok* といい、'judgment of the gods' という。後に古代ノース語で *ragnarokkr* といい、'twilight of the gods' というようになったという。

以上が Tuesday に纏わる『北欧神話』の「神々の由来」である。思うに詩人 Keats はこのような『北欧神話』の神々の由来を踏まえて、同じ血族に繋がる自分自身の存在を意識し、病弱な人間としての Keats、また詩人としての Keats の「悪戦苦闘」を明示し、each Tuesday に「永遠の青々とした大地が海中から浮上し、新しい世代の神と共に生き残りたい」という強い願望を切に託するのではあるまいか。

この『北欧神話』はあの『古代ゲルマン神話』に繋がってゆく世界を想像するのも、また楽しい限りである。これを夢想しながら、詩人 Keats は、
毎週火曜日の夕あけの裕福なレバント地方から上陸するとしたら！
と歌うのだろう。Tiu の神が『ギリシャ神話』の Zeus の神に繋がることを夢想するのも心楽しい。しかも「太陽が昇るところ Revant」からの客を迎えることもまた絶妙である。遠い祖先の誉れを讃えるのだ。そして詩人 Keats は、

In little time a host of joys to bind,
And keep our souls in one eternal pant!
と歌うのだ。ここにも、「to 不定詞」が用いられているのである。まず、詩人 Keats は、
To bind a host of joys in little time!
と歌い、そして等位接続詞 and を使って、
To keep our souls in one eternal pant!
と歌い続けるのだ。and は、このように「to 不定詞」の副詞用法を対等の関係で結ぶ接続詞である。

前者の、in little time というのは、in no time とか、或いは、in less than no time という言い方と同じ意味に近いのではないか。というのは、little というのは、Minton によると「限りなくゼロ (no) に近いことを」イメージするからである。たとえば、In less than no time you shall hear. (「すぐに聞かせてやろう。’) というふうに、である。「すぐに」「たちまち」「直ちに」という意味を持つ副詞句である。出口訳を見ると、「わずかの時間に」と読む。

「たちまち」何をするのか、というに、それは「束ねる」(to bind)と歌うのだろう。何を「束ねる」のか、というに、それは、「数多くの喜び」(a host of joys)である、と歌うのだろう。動詞 bind は、「ひもなどで縛ってしっかり固定する」が本義がある。Cobuild 版によると、If you bind something or someone, you tie rope, string ... around them so that they are held firmly. と説明する。後半の、so that they are held firmly. が重要である。「しっかり持ちこたえられている・包み込まれている」という held (hold) 感覚が大切である。それも包む手は母の手であるという感じだ。そこには父の安心感も感じるように、である。

しかも、詩人 Keats は“a host of joys”と歌うのだ。こ

れは、a lot of joys という意味である。がしかし、詩人 Keats は敢えて、a lot of joys と歌わないで、わざわざ、a host of joys と歌うのである。

思うに詩人 Keats は、この a host of joys の host に託して、「天使の群れ」(hosts of heaven)を夢想するのではあるまいか。それはまさしく、「日が、月が、星が輝く」ような喜び (joys) であるとうたうのではないか。しかも『聖書』の「サムエル記上」第17章第45節に、

...but I come to thee in the name of the LORD of hosts,

という神の言葉を重ねての、厳粛にして厳格な喜び (joys) を歌うのではないか。出口訳を見ると、「数多くの喜び」と読む。悦とは、「心のわだかまりを取り去ること。つまり、よろこぶこと」をいう。喜とは、「神に食物をすすめ、神とともに食べことは、古代では最大のさいわいであったことから、よろこびの意となった」という。思うに、詩人 Keats は、

直に数多くの喜びの天使たちを母神の手で包みこむとしたら！

と歌うのではないか。そして詩人 Keats は続けて、

And keep our souls in one eternal pant!

と歌うのである。ここにいう our souls の our というのは、8行目の所有格 our と同じで、1行目と5行目の主格 we の所有格である。「我々の魂」と歌うのだろう。

Soul というのは、Cobuild 版によると、... Many people believe that your soul continues existing after your body is dead. と説明する。A. W. Frisby 版によると、man's spirit, character; that which we believe still lives when the body dies. と説明する。「永遠不滅のもの」を指すという。soul という語は、ドイツ語の Seele と同語源で、おそらく元古代ゲルマン語で「湖または海に関わるもの」であって、当時、魂は湖または海で生まれ、湖または海に帰ると考えられていたという。類似語の spirit という語は、元ラテン語の spiritus から派生したもので、もとは「息」という語源であるという。動詞は、spirare (「息をする」) という。『聖書』の「創世記」の第2章第7節に、

And the Lord God formed man of the dust of the ground, and breathed into his nostrils the breath of life; and man became a living soul.

という神の言葉が明記される。この神の言葉の明示する、「神によって吹き込まれる生命の息吹」を想起しよう。

難解なのは、one eternal pant, である。出口訳を見ると、「ひとつの永遠なる渴望」と読むのだ。これは意味不明である。Pant というのは、Cobuild 版によると、If you pant, you breathe quickly and loudly with your mouth open, because you have been doing something energetic. と説明する。動詞の「あえぐ」という意味である。

思うに、この謎めいた、one eternal pant を説くには、矢張り、『聖書』の神の言葉を想起すべきであろう。それは「詩篇」の第二巻の第42篇第1節と第2節の神の言葉である。これは、「聖歌隊の指揮者によってうたわされたコラの子のマスキールの歌」である。曰く、
As the kart panteth after the water brooks, so panteth
My soul after thee, O God.
My soul thirsteth for God, for the living God:…
という神の言葉である。「神よ、しかが谷川を慕いあえぐように、わが魂もあなたを慕いあえぐ。」「わが魂はかわいているように神を慕い、いける神を慕う…」がこれである。この神の言葉を踏まえて、筆者はこう精読したい。
そしておお神よ、我々の魂は永久にあなたを慕いあえぐとしたら！
と。これが筆者の解釈である。

Eternal というのは、「長く続く」が原義である。「(始めがなく、終わりが無い) 永久の、不滅の」というイメージをもつ語である。類似語の、everlasting, endless, と比べると、eternal という語は、「神」に使用する形容詞である。

おお、毎週月曜日の朝共和国インドから遥々到着するとしたら！
毎週火曜日の夕あゝの裕福なレバント地方から上陸するとしたら！
数多くの喜びの天使たちを直ちに母神の手で包み込むとしたら！
そしておお神よ、我々の魂は永久にあなたを慕いあえぐとしたら！

と詩人 Keats は切実に歌い上げるのではあるまいか。これが「3番目の4行」の世界である。つまり、「起・承・転・結」の「転」の世界である。これは魂の世界で「祖先との出会い」や「神々との出会い」それに「食卓を囲んでの遠来の客との閑話の喜び」を歌い上げる、という新しいテーマでもある。そして、詩人 Keats は、

This morn, my friend, and yester-evening taught
Me how to harbour such a happy thought.
と歌い収めるのだ。思うに、taught というのは過去時制ではなく、これもまた「仮定法」の過去形であるというのが筆者の解釈である。つまり、詩人 Keats は、この sonnet の最初の行の、I wish を最後の行にも歌い上げるのだ、と思う。

ご覧の通り、これは「2行連 (couplet)」である。別に「対連」ともいう。押韻する2行から成るからだ。

志子田光雄は、「一般に couplet は2つの end-rhyme が密着しているため技巧的かつ知的な感じを与え、格言風の詩に多く用いられる。」という。さらに「Couplet が連続して用いられる場合には、1行目が読み終えられるとすぐに次の行に同一の韻が期待されるため速やかに進んでゆき、したがって次々に展開を必要とする物語詩の詩形としても適切である。」という。これはイギリス人が好む「いましめ」的な対韻であり、「警告」的でもある。

This morn に対して、yester-evening を規定するのは、巧妙である。松浦は「yester evening=yesterday evening cf. yester night (last night)」という注釈を添える。注意すると松浦は、yester-evening を、yester evening という。短いハイフンが無い。これは誤植であろう。Allott 版も、そして Ricks 版も、de Selincourt 版も、yester-evening であり、松浦版も、yester-evening であるからだ。注釈での誤植か。

Yester というのは、後に短い hyphen が付く場合と、付かない場合がある。(1) hyphen が付かない場合の yester は形容詞で、古語であり詩語で、「昨日の」という。(2) hyphen が付くと、「すぐ前の、昨… (last)」の意味の連結形となり、接頭辞であるからだ。また yester というのは、別に yestern ともいう。

Yester-evening (「昨夕」) は yesterday evening の古語であり詩語である。yester-night (「昨夜」) は yesterday night の古語・詩語である。evening は「日没から就寝」までをいう。出口訳を見ると、「今朝と昨夜」と読む。筆者は「きのうの夜」ではなく、「きのうの夕方」と読みたい。「夕べ」の長閑なひと時の雑談を味読したいからである。

思うに詩人 Keats はこの“this morn”に託して、9行目の“each Monday morn”をイメージし、更にこの“yester-evening”に託して、10行目の“each Tuesday (evening)”を暗示しているのではあるまいか。というのは、これは異国の文物に接触したい、という詩人 Keats の楽しい願いであるからだ。この「楽しい願い」を下敷きにして、詩人 Keats は親しい友人といつも一緒に居たい、と歌い上げるのだと思う。友人と朝に会い、また夕に会って、新しい詩を読みたい、語りたいと詩人 Keats は歌うのだと思われる。親しい友人とは、この sonnet のタイトルの James Rice である。Rice と Keats について、Gittings は、
Keats had seen much of Rice, and they had read poetry together.

と指摘するからである。

重複するが、詩人 Keats の歌う、my friend というのは、James Rice である。松浦は、この James Rice について、

James Rice は Dilke の表現によれば “He was a quiet true wit—extremely well read—had great taste and a sound judgement. For every quality that marks the sensible companion—the valuable Friend—the gentleman, and the Man.” (M. B. Forman: *Letters of John Keats*) と紹介する。ここにいる Dilke というのは、Charles Wentworth Dilke (1789-1864) といい、イギリスの批評家であり、ジャーナリストである。

Dilke によると、Rice は機知に富んだ人物であるという。また Rice は読書家で、芸術的感覚と批評眼の持ち主

である。相手は、分別のある友であるのか、役に立つ友人であるのか、紳士であるのか、また三つ子の魂をもた大人であるのかを見極める資質の持ち主 Rice であるという。

更に松浦は、「という人物で、キーツとは、文通を通して交際を続けた。Forman 編の書簡集には、1818年 March 24の手紙から始まり1819年12月までの3通の書簡が収められている。Dating は不明だが、Amy Lowell は、1818年4月20日としている。(John Keats, I, pp.615~618)その根拠は、彼女が偶然見つけた、もと、James Rice 所有の本、スペインのロマンス *Guzman d'Alfarache* の Rice の書き込みによっている。つまりその本の第一頁の top margin に、John Keats. From his Friend Js Rxxx 20th April 1818という記入がある由である。アメリカ系の学者は概ね、この説に傾き、Finney, Briggs もこれに拠っている。」と指摘する。

Maurice Buxton Forman というのは、父 Harry Buxton Forman (1842-1917) の息子である。彼は父の後を引き受けて、ほぼ完全な、*Letters of Keats* を出版した。

アメリカの女流詩人 Amy Lawrence Lowell (1874-1925) は、『ジョン・キーツ』(John Keats, 1929) の「補遺」(Appendix) の中に、

On the top margin of the first page of the book proper is written in Rice's handwriting:

"John Keats
From his Friend
Js Rxxx
20th April 1818."

と紹介している。

また、イギリスの女流批評家 Miriam Allott (1918-) は、『ジョン・キーツ詩集』(*The Poems of John Keats*, 1970) の中に、Written c. 20 April 1818, the date of the inscription in James Rice's gift copy to K. of the Spanish romance *Guzman D'Alfarache* (1634): K. was in Teignmouth at this date and Rice presumably gave the book to him during the short visit to what K. called 'your favourite Devon' (Li254) celebrated in the poem.

と言及する。興味深いことは、すでに Rice は1634年発行のスペインの古典ロマンス *Guznan D'Alfarache* を所有し、愛読書の1冊であることである。そして、このロマンスが Keats と Rice の二人の友情を結んだことである。また、Rice を、"your favourite Devon" と Keats が名づけたことである。Devon というのは、イングランド南西部の州である。原産は Devon という一品種の牛で有名である。Devon 州特産は、その牛乳を凝固した濃厚なクリームである。イギリス人は果物やデザートなどに添えて食べることが多い。このクリームを、Devonshire cream という。

James Rice の父は会社の経営者であって、Rice は父

の弁護士であったようだ。こんな Rice を Keats は「Devon 州の寵児」と名づけ、親交を深めたようである。Allott は、

K. met Rice through Reynolds in 1817 and remained warmly attached to him: see K's journal-letter of Sept. 1819. 'He is the most sensible, and even wise Man I know' (Li187) and Charles Dilke's comment in his copy of 1848 (Hampstead): 'dear generous noble James Rice—the best, and in his quaint way one of the wittiest and wisest men I ever knew.' と紹介する。ここにいう Reynolds とは、イギリスの詩人で John Hamilton Reynolds (1794-1852) といい、Keats の友人である。Reynolds は弁護士事務所員で、裁判所の書記をしながら、たえず詩文を書いたという人物である。

Keats はさらに James Rice について、「Rice は、自分の知人の中でも一番分別のある男で、一番賢明な男だ」という。また Keats の知人 Dilke も「Rice は大人の風格があり高貴な James である」という。「古風で粋な英国人紳士その者だ」という。

然し、イギリスの批評家で詩人の Robert William Victor Gittings (1911-92) は『ジョン・キーツ伝』(*John Keats*, 1968) の中に、

Rice, a young lawyer in his father's firm, was incurably ill, visiting Sidmouth for his health;... と言及する。気になるのは、Rice was incurably ill. という1文である。「彼は病気である。」からだ。それも、副詞 incurably の形容詞 incurable は、Cobuild 版によると、If someone has an incurable disease, they cannot be cured of it.

と説明するのを思うに、「Rice は不治の病にかかった人」であるからである。詩人 Keats も「肺結核患者」である。ともに相憐れむ2人である。

詩人 Keats は、James Rice を、my friend (「我が友」) と歌うのだ。friend というのは「愛する者」が原義である。そして詩人 Keats は、teach A to do (「A (人) に…の仕方を教える」という語法を用いるのだ。無論、主格は人、即ち「我が友」である。

我が友はこの僕に…の仕方を教えてくれるならばいいのになあ。

と歌うのではないか。出口訳を見ると、「わが友よ、…わたしは…教えられたのだ。」と読むのだ。これは可笑しい。詩人 Keats は明らかに、I wish (that) my friend taught me how to do. という「仮定法」を最終行にも使用しているからである。この最終行の「仮定法」がいとも自然に最初の行の「仮定法」に繋がるように、詩人 Keats は詩的工夫を凝らしているからである。出口はこの詩人 Keats の詩的工夫を全く見逃しているのは不可解である。

Harbour というのは、他動詞で「<悪意・希望など>を心に抱く」という意味である。

勿論 Harbour は「軍事用避難場所」が原義であることを下敷きにして、詩人 Keats は
このような楽しい楽しいことを心に抱く仕方を教えてくれるならば
いいのになあ。

と歌うのか。such a happy thought の such というのは、「このような…」であるから、「どのようにか」を文脈に添って類推することが必要である。それは勿論人間味のある友人 Rice の「機知」であり、また「明るさ」である。

名詞 thought の動詞 think は「思慮深さ」が原義だ。happy は「偶然 (hap) の (y) (幸運による)」が原義である。

思うに詩人 Keats は、最後の2行を、

今朝も会って、我が友は、昨夕と同じように、このような楽しいことを
この僕の心に抱くその抱き方を教えてくれるならばいいのになあ。

と歌い収めるのではないか。これは、「起・承・転・結」の「結」の世界である。残された時間の許す限り、新友 James Rice と会って、Rice の持つ「異国の詩文の香り」も然ることながら、矢張り、Rice その人の人間の魅力を接收したい。というのは、Keats も Rice もともに「不治の病にかかった」者同士であるのに、どうして Rice はこんなに「明るく」そして「人をこんなに笑わせる」ことができるのか。まるで Rice は「光」のような人物だ。Rice の光に浴すると、Keats までも「楽しく」なる。これは正しく英国紳士だ。伝統的な英国紳士の“wit”であり、また“gaiety”である。

...but he (Rice) made light of his affliction with constant wit and gaiety. Neat and dapper, he had the sufferer's gift of husbanding his energy. Suffering too had given him a wisdom which Keats recognized and admired, saying that he 'makes you laugh and think'.

という Gittings の指摘を想起しよう。

以上、「ジェイムス・ライスに寄せて」という詩題のこの sonnet を読み終えて、筆者の思うこと・感じることは、詩人 Keats の短命の歎きである。それも母も弟 George や Tom と同じ「肺結核」に冒されたという、呪われた身の上の John Keats であるという哀れさである。

そんな苦しい遣る瀬無い生活の中で、詩人 Keats は親友 Reynolds の紹介で、若い弁護士 James Rice を知った。会うと、なかなか見上げた英国紳士である。Rice はスペインの古典ロマンスを愛読するという豊かな教養の持ち主である。

2 人はともに「不治の病にかかった」者同士である。会うと、嬉しいことに、Rice とは不思議に馬が合う。気が

合うのだ。しかし、Rice には、Keats の持たない魅力がある。それは、Rice の“wit”であり、“gaiety”である。

受難者 Rice は即ち知恵者 Rice である。

この魔可不思議な知恵者 Rice を支えているのは、恐らくは、イングランドに語り継がれる、以下の諺であろうか。
Whom the gods love die young.

The gifted die young.

これはともに、「才子短命」「才子佳人薄命」という。

イエスも若くして十字架上で刑死した。

思うに、この14行詩は「仮定法」を用いて歌われた珍しい作品である。それも「願望表現の仮定法」である。特に最後の2行の仮定の世界は、詩人 Keats の「個人的感情表現」である。James Rice と一緒にいると、それは誠に楽しいことばかりだ。どうしてこんなに楽しいのだろう。楽しくなるコツを是非とも伝授して欲しい。

今朝も会って、我が友は、昨夕と同じようにこのような楽しい楽しい
ことを、この僕の心にいづくその抱き方を教えてくれるならばなあ。

「実際は楽しくなる仕方がわからないが、もし楽しくなる方法が判れば」James Rice のように明るく楽しく生きるだろうになあ。「おれはほんとうに馬鹿だなあ。」「あの時、聞いていたら、今ごろはもっと楽になれるのになあ」という詩人 Keats の個人感情や意見の吐露が仮定法の世界である。

拙文の作成にあたって次の辞典辞書、聖書などを参考にした。それぞれ附記しなかったものもあるので、お断りしておきたい。

*Shibata Tetsusi. *The New Anchor English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Gakken, 1988.

*Kihara Kenzou. *The New Century English-Japanese Dictionary*. Third Edition. Tokyo: Sanseido, 1996.

*Konishi Tomoshichi, Yasui Minoru, Kunihiro Tetsuya. *Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary*. Second Edition. Tokyo: Shogakukan, 1994.

*Saito Takeshi, Nishikawa Masami, and Hirai Masao. *The Kenkyusha Dictionary of English and American Literature*. Third Edition. Tokyo: Kenkyusha Limited. 1985.

*Konishi Tomoshichi. *Taishukan's Fresh Genius English-Japanese Dictionary*. Second Edition. Tokyo: Taishukan, 1996.

**Holy Bible*. Tokyo: Japan Bible Society, 1956.

**The Holy Bible, containing the Old and New Testaments*. London: Collins' Clear-Type Press.

*Ad de Vries. *Dictionary of Symbols and Imagery*.

London: North-Holland Publishing Company, 1974.

*Konishi Tomoshichi, Mamoru Yasui, and Tetuya Kunihiro. *Shogakukan Progressive English-Japanese Dictionary*. Second Edition. Tokyo: Shogakukan, 1987.

*Shimamura Morishuke, Doi Kouichi, and Tanaka Kikuo. *Iwanami's Simplified English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Iwanamishoten, 1976.

*Nishio Minoru, Iwabuchi Etutaro, Mizutani Sizuo. *Iwanami Japanese Dictionary*. Tokyo: Iwanamishoten, 1971.

*John Sinclair. *English Dictionary for Advanced Learners*. Third Edition. England: Harper Collins, 2001.

*A.W. Frisby. *Longman Pocket English Dictionary: A First Learning Dictionary*. Harper and London: Longman Group Limited, 1965.

*Shinmura Izuru. *Koujienn*. Third Edition. Tokyo: Iwanamishoten, 1983.

参考文献

Allott, Miriam. *The Poems of John Keats*. New York: Longman, 1986.

Barker, David. *You drive me up the wall*. Tokyo:

Alc, 2003.

Deguchi, Yashuo, Trans. *John Keats: The Complete Poems*. III. Tokyo: Hakuosha, 1980.

Fukushima, Takahiko. *Answer English Grammar's Riddles*. 041. Tokyo: Chikuma Shinsho, 1997.

Gittings, John. *John Keats*. New York: Penguin Books, 1968.

Inglis, Fred. *Keats. Literature in Perspective*. London: Evans Brothers Limited, 1966.

Lowell, Amy. *John Keats*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1929.

Matsuura, Tohru. *Keats' Sonnets*. Tokyo: Azuma Shobo, 1966.

Minton, T. D. and Onizuka, Mikihiro. *"Tokyo University" English*. I and II. Tokyo: Kennkyuusha, 1999.

O'Conner, Patricia T. *Woe Is I*. Trans. Takahiko Soejima. Tokyo: DHC, 2002.

Oonishi, Hiroto, and McVay, Paul Chris. *Native Speakers' English Grammar*. Tokyo: Kennkyusha, 1996.

Ozaki, Tetuo. *"Super" English Power*. Chuko Shinsho La Cief 101. Tokyo: Chuokoron Shisha, 2003.

Ricks, Christopher Bruce. *John Keats: The Complete Poems*. London: Penguin Books, 1988.

Selincourt, de E. *The Poems of John Keats*. London: Methuen and Co. LTD., 1920.

Yositake, Michio. *My Favourite English Poems*. Tokyo: Chukyo Press, 1976.